

家庭で育つ権利を保障する社会 ～スウェーデンにおける里親委託率の高さの背景～

1. 背景と目的

個人主義の国にも関わらず、スウェーデンでは里親制度の割合が高いことから分かるように、**家族で過ごす時間を大切にしているのはなぜか**。そこで日本とスウェーデンの児童養護制度の比較から、**里親制度を重視する背景**を明らかにしていく。

2. 児童養護制度の比較

日本：里親委託は少数派、多くは児童養護施設

→課題として、職員の人手不足があげられる。結果、子ども一人ひとりのケアまで行き届かないなどが発生。

スウェーデン：全体の55%が里親によって保護される。中でも親族里親が多く45%と里親のほぼ半分

→日本では里親と親族里親には給付額に大きな差がある。にも関わらずスウェーデンでは差がないのはなぜか

→その背景には、「**家族にできるだけ近い形で過ごすことが大切**」があると思われる。

3. 少子化と子ども最善の利益

スウェーデンでは早くに少子高齢化が到来。

1930年代以前は**保守的出産奨励主義**と**新マルサス主義**が対立していたが、それらを批判し、社会構造改革を**ミュルダール夫妻**が行った。

当時の社会構造は子どもを産むことは、多子貧困か少子富裕の二択化となっており、これを政府が取り除く必要があるとミュルダール夫妻は「人口問題の危機」の中で述べた。

→スウェーデンは家族政策を推進していくこととなる。

→その推進の終盤、子供の最善の利益と子供が家庭で育つ権利が迎合し、結果、里親制度が発達する。

4. 考察

日本も従来の児童養護施設中心から里親制度中心へと移行していくと思われる。そのためには①里親に対する理解（→言葉は知っていても、内容を知らない。）②児童の問題の複雑化（虐待、知的障害、発達障害など）（→里親研修、養育技術の向上）③実親との関係（→実親の不安に対するケア）が必要となってくると私たちは考える。